

新建・寺子屋 (モダニズムの研究) 239 報告

近代建築を多角的に検討／モダニズム建築文献再読；

2017. 1.18.

日本の近代建築の再考について 話：三沢浩
—藤森照信『日本の近代建築』の研究—

■ 寺子屋 239 は 5 人の参加で開催されました。

■ 「お雇い外国人」がもたらしたものはなんだったのか。その一端がいわゆる「近代建築」に表れているとすると、その一つは、中央集権国家であろうとする「権威」の視点であり、はっきりしたヒエラルキーを「様式」に表明しながら、折衷を経て、建築とその敷地の中で完結します。

もう一つが「都市」という視点ではないかと思えます。都市への意識は当初は権威の視線と重なっていましたが、すぐに民の活発な活力が展開する場になっていくことで、開かれた都市の視線が大きくなってきます。(ちなみに、そうした都市への視線と近代建築が交差する残影は大阪に多く残っているような気がします)

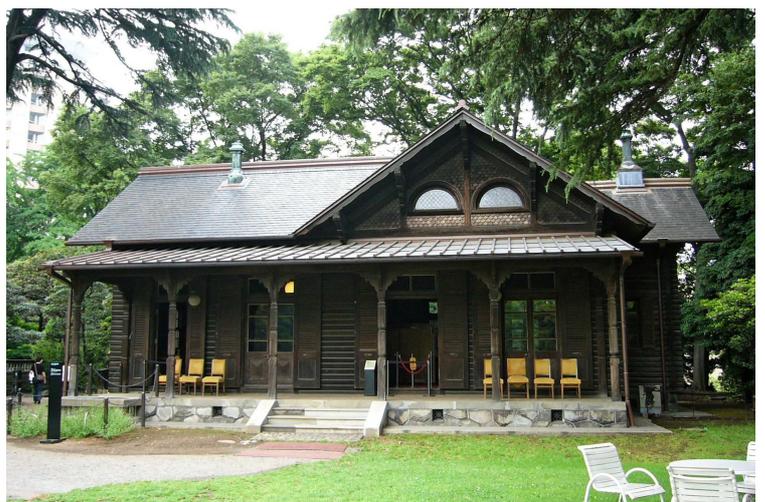
■ エンデ&ベックマンの官庁集中計画と比べた時、コンドルは都市の視点に乏しかったのではないかという気がしてしまいます。それが彼の弟子たちによってどのように継承され、克服されていったのでしょうか。



J. コンドル 官庁集中計画(第1案)



J. コンドル ↑旧岩崎邸 撞球室→



新建・寺子屋(モダニズムの研究)238

近代建築を多角的に検討／モダニズム建築文献再

2017.1.18. 話：三沢浩

藤森照信『日本の近代建築』の研究

1. 上巻の概要についてもう一度

1. コロニアルの上陸をとり入れた長崎の建築
2. 雇われ外人建物の顛末について概要
3. J.コンドルの果たしたこと、弟子、日本の生活、残した建築など

2. 上巻のポイント、日本人の建築家の出現

1. 24歳のコンドルが教えた21人の日本の建築家たち
2. 第1回生の5人の働きについてもう一度
3. 初期の建築家たちと英国、ドイツ、フランス派のこと

3. 下巻の概要をもう一度おさらい

1. 明治から大正へ(自覚の世代とは)
2. アメリカ派とヨーロッパ派について
3. 社会政策の概要
4. モダンデザインとモダニズムの内容

4. 下巻の最後部のレーモンド、前川、丹下について

1. 藤森のレーモンド評価のポイント
2. 同じく前川と丹下のことなど
3. 下巻に続く「現代」について考えること

5. くりかえしたことの詫びをのべる

次回 <寺子屋 240> ■近代建築を多角的に検討■モダニズム建築に関する著作再読
藤森照信『日本の近代建築』の研究—2

話：三沢浩

2017年2月22日(次回は都合により第4水曜日になります) PM 7:15~

場所：新宿区水道町2-8 長島ビル2階(江戸川橋駅神楽坂駅徒歩5分)

会費：400円

問合せ：大崎元 (有)建築工房匠屋 03-3716-1743 3716-8459(fax) VED03705@nifty.com